障がい児教育　言語部門理論研修会　終了報告

テーマ	**側音化構音と口蓋化構音の指導と支援**
日　時	令和　4年　7月　29日(金)
会　場	**石狩教育研修センター**
講　師	今井　智子　氏 北海道医療大学　名誉教授（言語聴覚士）
参加者	34名

研修会の様子	
	構音障害の中でも、側音化構音、口蓋化構音という専門的なテーマの講習だったため、言語部門からの参加者が多かったが、それ以外にも、発達通級や特別支援学級、通常学級の先生等、言語障害に興味を持つ様々な人々が参加した。アンケート結果を見ると、「非常に分かりやすく即実践できる内容」「気になる児童を良く観察してみようと思う」など、実践に生かそうという前向きな意見が多かった。
	講演内容は、小児の構音障害を理解するための基礎的な知識から始まり、構音指導の実際で終わる、段階を踏んだものだった。 訓練方法が具体的に提示されるなど、自身の指導方法を振り返り、実践に生かすことのできる講演だったが、それだけではなく、参考資料を示すことで、更なる自己研修を促す意図も感じられる内容になっていた。
	当初は施設内リモート研修も視野に入れて準備を進めてきたが、40 名の枠内に収まったため、感染症予防対策を行いながら対面による講演のみを行った。講演は、構音障害に関する確認から始まったが、音声学に関しては、時間の制約により、『日本語音声学入門改訂版 2006』(斎藤純男)がテキストとして紹介され、構音指導の基盤となる知識の習得が推奨された。
	本研修のメインテーマである、側音化構音・口蓋化構音については、それぞれの構音障害の定義や特徴(なりやすい音、構音操作の特徴など)などの説明が行われ、その後、側音化構音・口蓋化構音を判断するために、対象児の構音について、音の評価、構音操作の観察、呼気流出部位の確認の3つを行わなければならないことが示された。併せて、鼻息鏡の使用についても推奨された。
	最後に小児の構音訓練の基礎と側音化構音・口蓋化構音の指導例が示された。基本操作(音)の獲得訓練では「音・音節・音節形、単語・文・文章、会話」という産生訓練のプロセスの確認が行われ、指導者が正しい聴覚的・視覚的モデルを提示すること、その子が楽に出せる音を見極めて指導に生かすこと、の大切さが述べられた。構音指導を行う先生方にとって、とても有意義で意欲を高める講演だった。